

# 臨地実習における看護学生の「生活者」の理解に関する文献検討

菊池 真弓<sup>1)</sup> 若澤 弥生<sup>2)</sup>

了徳寺大学・健康科学部・看護学科<sup>1)</sup>

国際医療福祉大学・保健医療学部・看護学科<sup>2)</sup>

## 要旨

本研究の目的は、看護学生が「生活者」として患者を理解した内容を国内の文献から明らかにし、臨地実習において学生を指導する上での示唆を得ることである。文献は医学中央雑誌Web版とCiNii Articlesを使用し「臨地実習」「看護学生」「生活者」「対象理解」をキーワード検索し、目的に合致した21件を分析対象とした。結果、看護学生が看護の対象を病気の治療をうける患者ではなく「生活者」として理解した内容として【疾患を持ちながらの日常生活】【その人の生活習慣】【その人の家族】【その人の信念】【その人の社会的な側面】【その人の経済的な側面】の6つのカテゴリに分類することができた。看護学生が捉えた患者の情報の中から、なぜ患者はその生活習慣を守りたいのか、なぜそのような思いを持ったのかを指導に当たる教員は看護学生と共に考え、患者との直接的な経験をリフレクションさせることにより看護学生の「生活者」として患者を理解する支援となることが示唆された。

キーワード：臨地実習 看護学生 生活者

## A literature review on the understanding of "ordinary persons" among nursing students in clinical training

Mayumi Kikuchi<sup>1)</sup> Yayoi WakaZawa<sup>2)</sup>

Department of Nursing, Faculty of Health Sciences, Ryotokuji University<sup>1)</sup>

Department of Nursing, School of Health Sciences, International University of Health and Welfare<sup>2)</sup>

## Abstract

The purpose of this study is to clarify the content of nursing students' understanding of patients as "ordinary persons" from domestic literature and to obtain suggestions for teaching students in clinical practice. The literature was searched using the Web version of the Central Medical Magazine and CiNii Articles using the keywords "clinical practice," "nursing students," "ordinary persons," and "object understanding," and analyzed 21 cases that matched the purpose. In this study, we conducted a literature review on understanding recipients of nursing care as "ordinary persons" rather than patients undergoing treatment for illness by nursing students in clinical training. The articles fell into the following six categories: "daily life with illness," "lifestyle of each person," "family of each person," "beliefs of each person," "social aspect of each person," and "financial aspect of each person." The results suggest that nursing students' understanding of "ordinally persons" is facilitated by thinking together with the students about why the patient wants to keep his/her lifestyle and why he/she has such a thought based on patient information perceived by the nursing students and letting them reflect on their direct experiences with the patients.

Keywords: clinical training; nursing students; ordinary persons

## I. はじめに

近年我が国における少子高齢化の進展による人口構造の変化は保健・医療・福祉にも大きな影響を与えている。生活習慣病をはじめとする慢性疾患患者が増加<sup>1)</sup>し患者の生活を支えるという課題に対する多様なニーズに対応する必要性から、医療中心ではない視点として対象を「生活者」として捉えるという概念がある。「生活」とは人間の存在そのもので各個人の主体的な営みであり<sup>2)</sup>、その「生活」は、その人の価値観、習慣、考え方、暮らし方、生き方などによって形成される<sup>3)</sup>。看護において「患者」と表現する時には画一的な印象がつきまとうが、「生活者」と表現する時には1人の存在として自分の思想を経験の中から見いだしていく存在であり<sup>4)</sup>、その人の生きてきた個の歴史の中で培われた生活習慣や生活信条を持ちながら生きている人として捉えるとしている<sup>5)</sup>。今後は疾病を有しながら長期間生活する人々が増加し、看護師は目の前にいる患者の症状や疾患だけではなく、一人の「生活者」として個別性を尊重した関わりが求められると考える。

看護師を養成する看護基礎教育のカリキュラムにおいて、対象者の健康課題に対応する実践能力を養うために臨地実習は重要な位置づけにある。臨地実習が講義や演習と異なる点は、既習の知識や看護技術を実際の個別の対象者に対し適応させ科学的根拠に基づいて実践していく学習である。看護学生は患者や家族、医療関係者とかかわり人間関係を深めながら看護の理論と実践を統合して理解することが臨地実習において求められている<sup>6)</sup>。高齢化や疾病構造の変化により、臨地実習は1996年の看護基礎教育のカリキュラム改正によって入院治療を行う病院から人々が社会生活を営みつつ療養生活を送る地域や在宅へと学習する場所が多様化した。2007年の厚生労働省の「看護基礎教育の充実に関する検討会報告書」<sup>7)</sup>においても、看護学生が患者の価値観や患者にとっての生活の意味に気づき、生活習慣や生活信条を持ちながら生きている「生活者」として理解すると述べられている。さらに2019年の厚生労働省の看護基礎教育検討会<sup>8)</sup>の看護師教育の内容と方法においては、地域に暮らす人々の理解とそこで行われる看護や多様な場での実習や多職種連携に関する実習を促進するとしている。しかし看護学生が臨地実習で出会う対象者の多くは異なる発達段階にあることが多く<sup>9)</sup>、患者の生活背景や生きてきた個の歴史の中で培われたその人らしい生活スタイルや多様な価値観を持った「生活者」として理解をすることは限られた実習期間の中では容易ではない。看護学生は日々変化する患者の状態の変化に追いつくことが難しく<sup>10)</sup>、観察し得られた患者の情報が「生活者」としての一端を示すものであると理解していくためには、教員による学びのサポートが必要となると考える。

先行研究においては、生活の概念を検討した文献<sup>11)</sup>や看護学研究における生活の概念を分析した文献<sup>12)</sup>があるが、「生活者」に対する概念の分析や、看護学生の「生活者」の理解に関する文献を統合し検討された論文は見当たらなかった。今後は、複数の疾病や障がいを抱える患者の健康問題が長期化するとともに複雑化するため“疾病”ををみる「医療」の視点だけではなく、生きていく営みである「生活」の視点をも持って“人”をみることに看護の役割がある<sup>13)</sup>。これらのことを踏まえ臨地実習においても、看護学生が「生活者」として患者を理解し、生活を支えるための看護について看護学生の思考を深化し言語化を促す指導が不可欠であると考え、そこで臨地実習において、看護学生が病気の治療をうける患者ではなく「生活者」として理解した内容を文献により明らかにし、実習指導に関する基礎資料にすることを目的とした。

## Ⅱ. 研究目的

本研究の目的は、看護学生が「生活者」として患者を理解した内容を国内の文献から明らかにし、臨地実習において学生を指導する上での示唆を得ることである。

## Ⅲ. 研究方法

### 1. 用語の定義

生活者：その人の生きてきた個の歴史のなかで培われた生活習慣や生活信条をもちながら生きている人<sup>5)</sup>

### 2. 文献検索方法

本研究では、2019年12月に医学中央雑誌刊行会Web版（Ver.5）（以下医中誌とする）及び国立情報科学研究所のCiNii Articlesを用いて国内文献を検索した。検索条件として論文の種類は原著論文とし、会議録、解説は除外した。検索期間は、「看護基礎教育の充実に関する検討会報告書」が公開された2007年以降～2019年とした。

「臨地実習」「看護学生」「生活者」のキーワード検索を行ったところ医中誌では43件が抽出され、CiNii Articlesでは3件が抽出された。次いで、「臨地実習」「看護学生」「対象理解」のキーワード検索を行ったところ医中誌では104件が抽出され、CiNii Articlesでは5件抽出された。重複文献5件を除外し、抽出された文献のタイトルと抄録から、実習の学びの達成度について実習記録やカンファレンス記録・レポートなどの学生の記述内容の分析や、学生に対し半構造化面接法による質的研究などから看護学生が患者を「生活者」として理解した内容が書かれている21件を文献検討の対象とした。

### 3. 分析方法

対象となった文献を精読し、対象の文献の中で、看護学生が患者とのかかわりの中から「生活者」として理解した内容が表記されている部分を抽出しコード化した。分析過程において対象文献に記されている看護学生が「生活者」として患者を理解した内容に戻り、意味内容を繰り返し確認し、類似の内容をサブカテゴリ、カテゴリとしてまとめた。倫理的配慮として文献の引用には著作権に配慮し出典を明記した。文献の前後の文脈の意味を重視しつつ、大木<sup>14)</sup>による文献レビューの研究方法を参考に文献の分析を行った。

また分析の全過程において質的研究者からスーパーバイズを受け研究の真実性の確保につとめた。

## Ⅳ. 結果

### 1. 分析対象文献の概要

看護学生が患者とのかかわりの中から「生活者」として理解した内容が標記されていた文献は、成人・高齢者看護学領域実習が7件、精神看護学領域の実習が2件、統合分野の実習が2件、地域・在宅看護学領域の実習の文献が10件であった。

### 2. 看護学生が患者とのかかわりの中から「生活者」として理解した内容

21件の対象文献を研究者が精読した。臨地実習において看護学生が「生活者」として患者を理解した内容が表記されている部分を抽出し、その類似の内容を分類しカテゴリとしてまとめた。その結果【疾患を持ちながらの日常生活】【その人の生活習慣】【その人の家族】【その人の信念】【その人の社会的な側面】【その人の経済的な側面】の6つのカテゴリに分類することができた。表1に分類結果を示した。

カテゴリを【】サブカテゴリを《》コードを[ ]として示す。以下、カテゴリごとに内容を述べていく。

### 1)【疾患を持ちながらの日常生活】について

看護学生が「生活者」として患者を理解した【疾患を持ちながらの日常生活】は《療養生活への思い》《自宅で生活するための疾病管理》《その人の地域の環境》や《社会資源の活用》といった側面や《潜在的な問題》《疾患への偏見》の6サブカテゴリで構成された。

看護学生は緩和ケア病棟での実習においては[終末期では患者は死と向き合いながら過ごす][家族のために生きる意思決定]や、地域看護学実習では[健康を実現していこうとする欲求]を持ちつつも[治療経過の見通しが立たないことに対する不安]と《療養生活への思い》を持つ人と理解していた。疾病の症状や障害がありながらも療養生活を継続維持するためには[自分の家で自分らしく生活するための疾病の管理]が必要である。看護学生は地域活動センターに通所する利用者との会話から、病気に至った経過やこれまでの生活を知り[病気との付き合い方を身につけている]と回復期にある精神疾患患者への理解を深めており《自宅で生活するための疾病管理》をしている人として理解していた。

そして「生活者」として[独居であってもインフォーマルな人的環境]や[近所や近隣の人との関係性]を持つ《その人の地域の環境》を理解し、[多職種による関わりと支援]や[サービスを利用した独居生活]をするために[対象者の選択による社会資源の活用]しながら生活している《社会資源の活用》について理解していた。

一方看護学生は、患者の[人的・物的・経済的支援の脆弱さ]から[これからどうなってしまうのかという心配]などの《潜在的な問題》を抱え、[精神障害者の日常生活の様々な面での困難や制約]や[作業能力はあるのに精神障害を理由に就業できないという葛藤]を持ち《疾患への偏見》から生活する上でのリスクもある人と理解していた。

### 2)【その人の生活習慣】について

看護学生が「生活者」として患者を理解した【その人の生活習慣】は、《毎日の生活習慣》や《今まで歩んできた生活背景》、毎日の暮らしを送る中での《生活の楽しみ》の3サブカテゴリで構成された。看護学生は[くつろいだ雰囲気自分の好きな音楽を聴く]姿や、臨地実習において実際に目にした[居宅での日常生活行為]から、その人らしい《毎日の生活習慣》を持つ「生活者」として患者を理解していた。そして[療養者・家族の様々な背景]があり[長年の生活で築いてきた日常生活のリズム]などから「生活者」としてその人の《今まで歩んできた生活背景》を捉えていたことがわかった。患者は[買い物が良い刺激]となったり、[入眠まで自分なりの楽しみ方]を持っていたりなど、看護学生は「生活者」として患者を毎日のちょっとした《生活の楽しみ》を大切にしている人と理解していた。

### 3)【その人の家族】について

看護学生が「生活者」として患者を理解した【その人の家族】は《家族の絆》《家族の常識》と《家族の負担》を含めた3サブカテゴリから構成された。

看護学生は[支えあっている存在][家族は患者にとってかけがいのない存在]と《家族の絆》を知る一方、[本当は家族と一緒に自宅で生活したいという思い]など様々な家族の関係を理解していた。そして[家族の生活の場には家族の常識がある]と[家族により違う望むゴール]があると《家族の常識》も理解していた。

その人と家族の関係性を理解する一方[介護が生活の中に加わることによる不安や疲労]と介護の生活していく合うでの負担や、[患者であっても治療に通いながら行う自宅での夫の介護]をしてい

る介護者自身の健康管理についてなど家族にも健康問題がある人と《家族の負担》についても看護学生は理解していた。

#### 4)【その人の信念】

看護学生が「生活者」として患者を理解した【その人の信念】の内容は、《その人の価値観》《その人の自尊心》や《その人の強み》の3サブカテゴリから構成された。

看護学生は対象と関わる中で、病院ではなく家で家族と過ごすことを大切にしたいと考えて「在宅療養生活を選択した人たち」と捉え、本人とその家族がどのように生活していきたいかという「自分で決め、自分で望む生活をする人」と《その人の価値観》理解していた。

そして「認知症だからわからない訳ではない」や「生き方や言いたいことを反映している繰り返す話」、「たくさんの仕事の話や、誇りに思っている言葉」から看護学生は《その人の自尊心》を理解していた。

そして認知機能に支障があっても患者として他者から支えられる存在であり「説明すればできる自己決定」「急がせずゆっくり落ち着いてやればできる事」そして「その人のできること」のように残存能力を持ち、《その人の強み》強みを持つ人と理解していた。

#### 5)【その人の社会的な側面】について

看護学生が「生活者」として患者を理解し内容は《家庭内の役割》と《社会的な役割》の2つのサブカテゴリから構成された。

看護学生は「社会や家族の中での役割を有している人たち」と本人の家庭内における役割を知り、他の家族構成員を含め家庭内の関係性や居住地周辺の地域性にも着目し、周囲の人々や環境とつながり影響し合いながら存在する人と理解していた。

看護学生は地域活動センターに通所する対象者が非常に低い賃金しか手に入らない現状の中でも楽しみを持って働く様子から「その人なりの働くことの意味」や、障がいを持っていても一生活者として「社会から求められている役割」を果たすことが可能であり、障がいはあっても彼らが一方的に支援を受ける存在ではなく支援を受けながらも主体的に地域社会で生活している「生活者」として理解していた。

#### 6)【その人の経済的な側面】について

学生が「生活者」として患者を理解し内容は《働いて収入を得る》の1つのサブカテゴリで構成された。

看護学生は外来通院中に「病院の待合室でも仕事をしている」患者の様子を見て、社会生活を営みながら仕事との両立を図り治療を継続している人であると捉えていた。一方看護学生は自身の生活体験を思い起こし、地域活動センターで働く対象者の「不安定な仕事と低賃金」に驚きつつも「障害は持っているが働いている生活」と暮らしていくための手段として《働いて収入を得る》と経済的な側面を持つ「生活者」として理解していた。

## V. 考察

臨地実習において看護学生が患者を「生活者」として理解した内容は【疾患を持ちながらの日常生活】【その人の生活習慣】【その人の家族】【その人の信念】【その人の社会的な側面】【その人の経済的な側面】と6つの側面に大別できた。これらから学生は「生活者」として患者のどのような部分を理解しているのか、またその点を踏まえ臨地実習の際に、教員は看護学生に対し「生活者」として患者を理解するための支援について考察していく。

表1 看護学生が「生活者」として患者を理解した内容

カテゴリ	サブカテゴリ	各文献から抽出されたコード	番号
疾患を持ちながらの日常生活	療養生活への思い	点滴を自宅に持ち帰る時の自宅での急変時に対する不安 副作用に対する不安 治療経過の見通しが立たないことに対する不安	柴田ら 15)
		終末期では患者は死と向き合いながら過ごす 家族のために生きる意思決定	竹山ら 16)
		健康を実現していこうとする欲求 自己管理しようとする意志	吉田ら 17)
	自宅で生活するための疾病管理	風邪をひかないように手洗い、うがい、マスクの着用の徹底 長い期間疾患とつきあい、疾患と共に暮らす生活	柴田ら 15)
		自分の家で自分らしく生活するための疾病の管理	山村ら 18)
		居宅での医療処置管理 17) 褥瘡を作らない工夫 17) 主体的な自己管理 17)18) 生活の中でリハビリテーション 17)	佐藤 19) 山口ら 20)
		病気との付き合い方を身につけている	川原ら 21)
		疾患と障害の共存	結城ら 22)
		内服薬の自己管理による病気のコントロール	高尾ら 23)
		しびれが出るため、うまく出来ない家事 味覚障害が出現しおいしく感じられない食事	柴田ら 15)
		日常生活・社会生活へ大いに影響を及ぼす痛み	竹山ら 16)
	その人の地域の環境	独居生活者への地域の協力 独居であってもインフォーマルな人的環境 療養生活を継続するその地域の特性	山村ら 18)
		地域で暮らしていけるような多職種との連携	小塩ら 24)
		近所や近隣の人の関係性	佐藤ら 25)
	社会資源の活用	多職種による関わりと支援 居宅でのケアサービス	佐藤 19)
		サービスを利用した独居生活	山村ら 18)
		対象者の選択による社会資源の活用 サービスの自己管理	佐藤ら 25)
		多職種との情報共有と連携の重要性	鈴木ら 26)
		家族は大切な家族のために様々な工夫を行っている	山村ら 18)
		病院とは違う工夫された生活環境	佐藤 19)
	潜在的な問題	今後の潜在的な問題	山村ら 18)
		人的・物的・経済的支援の脆弱さ	川原ら 21)
		これからどうなってしまうのかという心配	田代ら 27)
		夜間体の急変やせん妄、徘徊による転倒転落の危険性	岡本ら 30)
	疾患への偏見	精神障害者の日常生活の様々な面での困難や制約	結城ら 22)
		作業能力はあるのに精神障害を理由に就業できないという葛藤	高尾ら 23)
その人の生活習慣	毎日の生活習慣	生活スタイルや生活習慣	吉田ら 17)
		自分のペースでの生活 くつろいだ雰囲気の中で自分の好きな音楽を聴く 家族がキッチンで利用者と自分の昼食を調理	奈良ら 31)
		日常の出来事 居宅での日常生活行為 食卓の様子 食事のスタイル 排泄の状況 清潔保持の知恵	佐藤 19) 佐藤ら 25)
		毎日違う服装で、気温にあった服装	高尾ら 23)
	今まで歩んできた生活背景	療養者・家族の様々な背景	山村ら 18)
		長年の生活で築いてきた日常生活のリズム	小塩ら 24)
		発症する前の生活	川原ら 21)
		その人の持つ背景によって現れる様々な症状	田代ら 27)
		生い立ちや様々な考え方	園田ら 28)
	生活の楽しみ	入院前はどこへでも自転車で出かける行動	石渡ら 29)
		買い物が良い刺激	吉崎ら 32)
		入眠までの自分なりの楽しみ方	岡本ら 30)

カテゴリ	サブカテゴリ	各文献から抽出されたコード	番号
その人の家族	家族の絆	対象と家族との信頼関係	佐藤ら 25)
		支えあっている存在 何かに向かって一生懸命協力し合い生きていく存在 一人では生きられない存在	吉田ら 17)
		家族と離れ離れになって寂しい気持ちを感じる生活 本当は家族と一緒に自宅で生活したいという思い 長年住み慣れた自宅へ戻りたいという願い	田代ら 27)
		今までその家族が築いてきた絆や愛情を基に介護の協力がある 在宅における「家族」という存在の重要性	鈴木ら 26)
		家族は患者にとってかけがいのない存在 患者のことを一番知っている存在	竹山ら 16)
		家族と離れ施設で感じる寂しい思い	岡本ら 30)
		家族としてお互いに支え合っている在宅介護 在宅での介護には家族の協力	山村ら 18)
		娘が医師に疑問点を確認 長女による毎回の受診時の付き添い	柴田ら 15)
	家族の常識	家族の生活の場には家族の常識がある 療養者・家族には様々な背景がある 自分の生活の一部として療養生活を支える家族 家族による介護力も様々	山村ら 18)
		家族により違う望むゴール	小塩ら 24)
	家族の負担	介護は体力的精神的負担が大きい 訪問時間以外の療養者と家族の生活 家族が対応する緊急事態発生	山村ら 18)
		介護が生活の中に加わることによる不安や疲労	鈴木ら 26)
		療養者よりも家族や介護者が抱える多くの不安	小川ら 33)
		終末期患者の家族が、歩み始めた大切な人を喪失するという悲嘆のプロセス	竹山ら 16)
		介護者の健康問題	山村ら 18)
		患者であっても治療に通いながら行う自宅での夫の介護	柴田ら 15)
		医療依存度の高い利用者の家族の思い	吾郷ら 34)
その人の信念	その人の価値観	在宅療養生活を選択した人たち	山村ら 18)
		認知機能は低下しても変わらないその人らしさ	田代ら 27)
		生理的欲求を満たしながら目指す自己実現	吉田ら 17)
		価値観をもっている 生活の一部として「療養する」という選択をする人 自分で決め、自分で望む生活をする人	吉田ら 17)
		療養者・家族の意向や価値観	鈴木ら 26)
		本人・家族の歴史	小塩ら 24)
		対象者の個性や生活習慣への関心	佐藤ら 25)
		在宅療養者のニーズ 患者の意思や希望	吾郷ら 34)
		生活のありようや生活・人生に対する思い	結城ら 22)
	その人の自尊心	尊厳に配慮した日常生活援助 患者・家族の意思を尊重する支援	竹山ら 16)
		自分でできると嬉しい 認知症だからわからない訳ではない	田代ら 27)
		個性性の認識 生き方や言いたいことを反映している繰り返す話	吉崎ら 32)
		たくさんの仕事の話や、誇りに思っている言葉	白砂 35)
		車いすの生活でも生き生きと生活している様子	吉崎ら 32)
	その人の強み	説明すればできる自己決定	田代ら 27)
		家族や利用者にとっての強み	小塩ら 24)
		療養者・家族の持てる力の発揮や強みの理解	鈴木ら 26)
		手先は十分に機能している 急がせずゆっくり落ち着いてやれはできる事	田代ら 27)
		利用者のセルフケア力 療養者の自立を目指す 残存機能	吾郷ら 34)
		馴染みのある小集団で他者との交流ができる	川原ら 21)
		患者さんの残存能力 その人のできること	園田ら 28)
その人の社会的側面	家庭内の役割	社会や家族の中での役割を有している人たち	山村ら 18)
		対象者の自宅での役割	佐藤 19)
		家族の中での利用者の存在や家庭内での関係	小塩ら 24)
	社会的な役割	その人なりの働くことの意味	川原ら 21)
		社会から求められている役割	結城ら 22)
その人の経済的な側面	働いて収入を得る	病院の待合室でも仕事をしている	柴田ら 15)
		不安定な仕事と低賃金	川原ら 21)
		病気や障害を持っているが仕事に取り組んでいる	奈良ら 31)

## 1. 臨地実習において看護学生が患者を「生活者」として理解した内容

「生活者」とは看護学においては「患者」に対置するものとして用いられ、静的な状態を表すのではなく、悩みながらも自ら問題を見つけたり、長い時間の中で培われた自分の価値観や生活信条に基づいて行動しようとしたりする姿を指しており、生活の全体性を把握する主体を示す用語として用いられている<sup>45)</sup>。「生活者」として捉えるとは、対象者には日々の生活とその人が大切にしている価値観やその人らしい生き方・思いがあり、病気により療養が必要となった時に生じる辛さや違和感、その人にとっての生活の意味を見出し理解することであると下村<sup>4)</sup>らは述べている。つまり「生活者」として患者を理解するとはその対象の基本的欲求を変容させる病理的状态のニードだけでなくその人本来の基本的なニードにも着目して全体像を理解することであると考ええる。

Henderson(ヘンダーソン)<sup>36)</sup>は、人間の「14の基本的ニード」を明らかにし「看護の基本となるもの」の中で、14のニードに対する具体的な看護を著した。ヘンダーソンのニード論は、マズローの身体的側面(生理的なニーズ)に、心理的・社会的側面に関する内容を含んで構成されており、人間が人間らしく生きることを支える看護を展開するための重要な枠組みとなっている。ヘンダーソンは、健康を害している人の状態をこの枠組みに基づいて把握し、自分で基本的なニードが充足できない状態であることを見極め、それが充足するように援助することが看護師の役割であると考えた。この14の基本的ニードは人間の欲求が基準となっており、それらに基づく行動はその人の行動スタイルを作り、日常生活スタイルを作る<sup>37)</sup>。看護学生は臨地実習において対象の日常生活を支援する看護を実践している事が多く、特に在宅看護学などの実習の場合は患者の生活空間に入り生活スタイルを知り得ることが可能である。吉川<sup>38)</sup>は生活者を理解する力にコミュニケーション力が強く影響すると述べており、看護学生は訪問看護などの短時間のかかわりであってもその人の生きてきた歴史や生活背景に直接触れ、コミュニケーションを図ることで、その人らしい日常生活を送るための行動様式【その人の生活習慣】や【その人の信念】を知ることができたのではないかと述べている。看護学生が「生活者」として患者を捉えるためには、患者のこれまでの生活背景や価値観、その人の大切にしている思いや言動の意味を受け入れて患者の言動の背景を知ることが重要である<sup>39)</sup>。看護学生が理解した《毎日の生活習慣》はその人の生理的なニードであり、《その人の価値観》は所属と愛情のニード、《その人の自尊心》は自己尊重のニードであると考ええる。

さらに家族や社会においてどのような役割を果たしているのかといった社会的側面について理解した【その人の社会的な側面】のデータも抽出された。看護学生はカルテに記載されている職歴だけでなく、家庭や社会でどのように仕事をしてきたかなど対象者の《社会的役割》を捉えることができていた。在宅などの病院実習以外の実習においては〈社会から求められている役割を果たす〉結城<sup>22)</sup>〈対象者の自宅での役割〉佐藤<sup>25)</sup>のように、「達成感をもたらすような仕事をする」といった仕事や家事あるいは社会における具体的な役割を持ち、疾患を持ちながらもその人らしく生きている姿から、患者が社会生活と両立を図りながら治療を継続し自己実現をしようとしている「生活者」であることを看護学生は理解していたと言える。

それに伴い暮らしを立てるために必要な生計などに焦点をあて、看護学生は疾患を持ちながら日々の生活を送っている患者の【その人の経済的な側面】も理解していた。在院日数が短縮し、看護学生が患者の経済状況などに視点を向ける前に退院や転院となってしまうことが多いなかで、入院患者を対象とした実習だけではイメージが難しかった退院後や在宅での生活について多様な側面から理解を深めて《暮らししていくための手段》を捉えていた。これらは24時間医療者が存在している病院という治療の場の

学びだけでは得ることのできなかった臨地実習の学びである。この背景には、介護保険が施行され臨地実習が入院治療の場から人々が社会生活を営みつつ療養生活を送っている在宅などへ拡大したことにより様々な側面を理解したと言える。看護学生は、病院実習や在宅実習など異なる特性を持つ臨地実習の経験を重ねて行くうちに対象を患者という病理的状态のニードを持つ人としてだけ理解するのではなく、その人の本質ともいえる基本的なニードにも焦点を当てて患者を「生活者」として捉えていたことがわかった。

## 2. 看護教育への示唆

臨地実習の目的は看護学生が学内で習得した看護に必要な専門的知識・技術・態度を看護実践の場に適用し、看護の理論と実践を結び付けて理解し、看護の対象を全人的に捉えた看護を展開する能力を養うことである。看護学生は実習時間中に病棟や病室で一緒に時間を共有することにより、患者の生活背景やその人の秘めた思いや価値観などを知り得る機会に恵まれ、看護学生は臨地実習において看護の対象者に語ってもらう機会に出会い、自分と違う患者の生活を知ることによって生活者の理解が促進される<sup>5)</sup>。看護学生は教員と受け持ちの患者の看護援助の方法を検討する時や実習記録に書き記す内容を考察している時に、たまたま目にした患者の好みや生活スタイルについての情報を何気なく表出することがある。あるいは病棟看護師も知らない受け持ち患者の重要な情報を収集しており驚きを感じたこともある。看護学生は他者と関わるという社会経験が少ないため、似たようで同じではない千差万別の人間の生活の様相や、生活するための行動の背景にあることを含めたその人の今まで歩んできた背景や価値観の一つひとつの意味を深く掘り下げて理解していくのは困難を極めるといっても過言ではない<sup>39)</sup>。しかし、看護学生が患者のその人らしさについて何を感じどのように考えているのか、言葉や文字など言語化して表現しなければ教員や指導者も貴重な患者の情報や看護学生の考えを把握することは難しい。

「その人らしさ」とは黒田ら<sup>40)</sup>によると「内在化された個人の根幹となる性質で、他とは違う個人の独立性を持ち、終始一貫している個人本来の姿、他者が認識する人物像であり、人間としての尊厳が守られた状態」と定義されている。「生活者」の一端である「その人らしさ」を示す重要な情報とは、その人の生活習慣や性格、今までの人生の歩みから生まれた人生観や価値観に匹敵するような他者とは異なるその人の価値観、そして自尊心などの《その人の信念》などである。臨地実習において受け持ち患者やその家族とのさまざまな関わりの中から、患者のニード、特に自己実現のニード(こうなりたい、このようなことがしたいなどの希望)などの患者の言動を目にした看護学生の経験や思考の表出を促す関わりが教員には求められる。看護学生の知り得た〈今まで歩んできた生活背景〉〈その人の強み〉などの「その人らしさ」を示す重要な情報を共有することにより「生活者」のニードの充足を目指す看護について教員は看護学生の思考を深化させることができると考える。

看護学生自身が体験し考えたことを言語化し教員に伝えようとするやりとりは、さりげなく得ていた情報が実は「生活者」の一端である「その人らしさ」を示す重要な部分であると学生が認識する機会ともなり得る。安酸<sup>41)</sup>は経験型実習教育における学生との対話について、学生が自らの経験(直接的経験)を振り返り表出することが必要であり、教師は学生の直接的経験を把握し明確化するために学生の行動や話をよく見てよく聴く事が求められるとしている。さらに患者とのかかわりの中で看護学生が自らの気づきや実感を言語化できるような教員の「学習的雰囲気」が学生の主体的行動を促すために必要であると述べている。よって看護学生が捉えた患者のあらゆる情報の中からその人らしく生きる「生活者」の情報に焦点を当てるために、指導に当たる教員はなぜ患者はその生活スタイルを守りたいのか、なぜ

そのような思いを持ったのか学生と共に考え、患者との直接的な経験をリフレクション<sup>42)</sup>させながら看護学生の「生活者」の理解を促していくことが臨地実習という学習を支援する教員の重要な関わりであると考ええる。

## Ⅵ. 結論

1. 臨地実習において看護学生が「生活者」として患者を理解した内容として【疾患を持ちながらの日常生活】【その人の生活習慣】【その人の家族】【その人の信念】【その人の社会的な側面】【その人の経済的な側面】と6つのカテゴリが抽出された。
2. 指導に当たる教員は看護学生が捉えた患者の情報の中から、なぜ患者はその生活習慣を守りたいのか、なぜそのような思いを持ったのか学生と共に考え、患者との直接的な経験をリフレクションさせることが看護学生の「生活者」の理解の支援となることが示唆された。

なお、本研究の利益相反はない。

## 文献

- 1) 厚生労働省.2019.医療施設（動態）調査・病院報告の概況.  
<https://www.mhlw.go.jp/toukei/saikin/hw/iryosd/19/dl/03byouin01.pdf> (2021.9.14 11:00アクセス)
- 2) 天野正子 (1996) 「生活者」とはだれか 自律的市民像の系譜,中公新書,東京.12-14
- 3) 看護学を構成する重要な用語集. 日本看護科学学会学術用語検討委員会第9・10期委員会  
<https://www.jans.or.jp/uploads/files/committee/yogoshu.pdf> (2021.9.14 11:00アクセス)
- 4) 黒江ゆり子,藤澤まこと,三宅薫ほか (2006) 看護学における「生活者」という視点についての省察.看護研究39,337-343.
- 5) 下村裕子,河口てる子,林優子ほか (2003) 看護が捉える「生活者」の視点 対象理解と行動変容の「かぎ」.看護研究. 36, 199-211.
- 6) 厚生労働省.2007.看護基礎教育の充実に関する検討会報告書.  
<https://www.mhlw.go.jp/shingi/2007/04/dl/s0420-13.pdf> (2021.9.14 11:00アクセス)
- 7) 厚生労働省.2011.看護教育の内容と方法に関する検討会報告書.  
<https://www.mhlw.go.jp/stf/houdou/2r98520000013l0q-att/2r98520000013l4m.pdf> (2021.9.14 11:00アクセス)
- 8) 厚生労働省.2019.看護基礎教育検討会報告書.  
<https://www.mhlw.go.jp/content/10805000/000557411.pdf> (2021.12.1 19:00アクセス)
- 9) 福本仁美 (2014) 成人看護学実習における看護学生の学習困難に関する研究の動向－過去5年間の先行文献から－. 新見公立大学紀要.35,107-111.
- 10) 中本明世,伊藤朗子,山本純子ほか (2015) 臨地実習における学生の困難感の特徴と実習状況による困難感の比較 基礎看護学実習と成人看護学実習の比較を通して. 千里金蘭大学紀要.12,123-134.
- 11) 本多勇 (1998) 「生活」概念の検討と整理-「生活」研究のレビュー .国際医療福祉大学紀要.3,13-23.
- 12) 中木高夫,谷津裕子,神谷桂 (2007) 看護学研究における「体験」「経験」「生活」の概念分析.日本赤十字看護大学紀要.21,42-54

- 13) 公益社団法人日本看護協会 (2015) . 2025年に向けた看護の挑戦 看護の将来ビジョン いのち・暮らし・尊厳を まもり支える看護 <https://www.nurse.or.jp/home/about/vision/pdf/vision-4C.pdf> (2021.12.1 19:00アクセス)
- 14) 大木秀一 (2016) 看護研究・看護実践の質を高める文献レビューのきほん.医歯薬出版株式会社, 東京.
- 15) 柴田和恵,大野和美,臺野美奈子ほか (2015) 成人看護学臨地実習における外来看護体験実習での学び.天使大学紀要.15 (2) ,41-53.
- 16) 竹山広美,岡本裕子,野間雅衣ほか (2019) 看護学生の統合実習における緩和ケア病棟での学び - 実習終了後のレポートから - .看護・保健科学研究誌.17(1),92-100.
- 17) 吉田久美子.地域看護学実習における課題レポートに関する分析 - 生活者として捉えることの意味 - (2009) .東京医科大看護専門学校紀要. 19(1),13-19.
- 18) 山村江美子,田中悠美,稲垣優子ほか (2015) .在宅看護論実習における学び - 対象の理解と在宅看護実践の特性に焦点をあてて - .聖隷クリスファ-大学紀要.23,41-51.
- 19) 佐藤美樹 (2011) 在宅看護論実習における対象理解 対象を生活者として理解する過程に関わる要因.神奈川県立保健福祉大学実践教育センター看護教育研究集録.36,123-130.
- 20) 山口昌子,上田伊津代,辻あさみほか (2018) 慢性期看護実習における受け持ち患者を通した学生の学び - 実習レポートの分析から - .和歌山県立医科大学保健看護学部紀要.14,19-25.
- 21) 川原瑞代,中村千穂子,松本憲子ほか (2011) 地域看護学実習における地域活動支援センターでの学生の学び-実習記録の分析より - .日本看護学会論文集:精神看護.41,159-163.
- 22) 結城佳代,鈴木敦子,太田知子ほか (2009) 精神障害者社会復帰施設における精神看護学実習の学びの分析 - 地域看護学実習展開の可能性の検討 - .名寄市立大学紀要.3,15-22.
- 23) 高尾良子,越智百枝,酒井由紀子ほか (2008) 精神看護学実習における病棟と社会復帰施設での学びの特徴について第1報 - 対象理解に焦点を当てて - .香川大学看護学雑誌.12(1),77-83.
- 24) 小塩泰代,白石知子,大橋裕子ほか (2012) 在宅看護論実習の振り返り - 実習内容と学生の学びの状況の考察 - .中部大学生命健康科学研究所紀要.8,49-55.
- 25) 佐藤美樹,田高悦子 (2013) 在宅看護における生活者としての対象理解にかかわる学生の学びの視点.日本看護学教育学会誌.22 (3) ,47-55.
- 26) 鈴木昭子,前田和子 (2016) 在宅看護実習における学生の学び - 終了時レポートの分析から - .茨城キリスト教大学看護学部紀要.8,29-37.
- 27) 田代和子,岡本あゆみ,田村千恵子 (2017) 統合実習で看護学生が捉えた認知症高齢者の理解.淑徳大学看護栄養学部紀要.9,19-29.
- 28) 園田麻利子,上原充世 (2015) 成人看護学実習の看護の概念化に関する考察.鹿児島純心大学看護栄養学部紀要.19,27-36.
- 29) 石渡智恵美,菱刈美和子 (2018) 周手術期看護実習での学生が感じた困難感における対処のプロセス.総合学研究.1,21-28.
- 30) 岡本あゆみ,田代和子,田村千恵子ほか (2015) 老年看護学統合実習における夜間実習の学び - 認知症高齢者の対象理解をねらいとして - .淑徳大学看護栄養学部紀要.7,13-23.
- 31) 奈良育代,下田代智恵,馬場美香ほか (2009) 訪問看護ステーションでの実習における学生の学び.中国四国地区国立病院付属看護学校紀要.4,23-32.

- 32) 吉崎文子,太田節子 (2010) 高齢者看護実習 I における看護学生の学びの特徴-生活者である施設利用者との関わりを通して - .滋賀医科大学看護学ジャーナル,10(1),42-45
- 33) 小川典子,藤尾佑子,石清水伴美ほか (2017) 在宅療養移行支援を導入した在宅看護実習におけるIPEモデルの検証－医療モデルから生活モデルへのパラダイム転換－.順天堂大学保健看護研究,5,28-40.
- 34) 吾郷ゆかり,祝原あゆみ,栗谷とし子ほか (2011) 在宅看護実習の学びの構成.島根県立大学短期大学部出雲キャンパス研究紀要,5,101-109.
- 35) 白砂恭子 (2018) 老年看護学実習における認知症高齢者に対する学生の学び.日本認知症ケア学会誌,17(2) ,464-471.
- 36) ヴァージニア・ヘンダーソン (1960/1961). 湯楨ます. 小玉香津子(訳). 看護の基本となるもの.日本看護協会出版会.東京.
- 37) 茶園美香 (2006) 看護における「ニード論」「ストレス－コーピング理論」.日本集中治療医学会雑誌,13,431-435.
- 38) 吉川洋子,松本亥智江,吾郷ゆかりほか (2009) 生活者の理解に向けた基礎看護学実習の教育方法と評価.島根県立大学短期大学部出雲キャンパス研究紀要,3,51-59.
- 39) 舟島なをみ (2020). 看護学教育における授業展開 - 質の高い講義・演習・実習の実現に向けて - .医学書院.東京,80-84.
- 40) 黒田寿美恵,船橋眞子,中垣和子 (2017) 看護学分野における『その人らしさ』の概念分析 -Rodgersの概念分析法を用いて-. 日本看護研究学会雑誌40(2),141-150.
- 41) 安酸史子 (2015) 経験型実習教育 看護職を育む理論と実践.医学書院.東京,52-56,88-90.
- 42) 東めぐみ (2009) 看護リフレクション入門 経験から新たな看護を創造する.ライフサポート社.神奈川,26-27.

2021年12月21日 受理  
了徳寺大学研究紀要 第16号